

## 一〇七歳の告別式

「人間は本能が壊れた動物。文化がそれを補償する」

椎名 利

トランペットが華麗なメロディーを高らかに奏で、二人のテンパニストがリズムを刻むのに応呼し、オーケストラが大宇宙を表すかの巨大な音の渦を形作り、ホルストの『惑星』の第四曲『快樂の星 ジュピター』は、そのクライマックスにさしかかっていた。

丁度、その時電話が鳴った。

私はモニターにちらりと目をやり、一時停止のボタンを押すと電話を取り上げた。

電話の声は、従弟の陽一だった。大体普段あまり連絡もない親戚からの電話は、（よい知らせではなからう）と思いつながら、聞いていると「太一爺さんが亡くなった」と、伝えてきた。訃報には違いないが私はほっとして、「いくつになったのかな？」と問うと、「一〇七歳と三ヶ月だ」との声が返ってきた。

母の姉の連れ合いが太一爺さんだが、——母も姉も九〇歳で亡くなっていたが——この梨田家は十数代続く播磨平野の東に位置するM町の酒屋の家系で、M町は最近ではK市に併合されたものの古い街並みが残る田舎街だった。

私も、もう還暦を迎えたわけだから、伯父叔母などの訃報に接する機会が多くなるのもやむを得ぬことだと思いつながら受話器を置いた。

告別式の日、早朝に新横浜から新幹線に乗り西明石で在来線に乗換え、K市で行われる葬儀会場に向かった。

街外れの川辺にある告別式の会場には、すでに多くの人が詰め掛けていた。葬儀だと言うのにまるでお祝いの席みたいだ。

喪主を務める梨田家の長男幸一も、すでに八十半だろう。彼は、神妙にお悔やみを口にする私に、「いやいや、黒幕ではなくて、むしろ紅白の幕を張るべきだった」と、言った意味の言葉を口にしながらか、長寿を全うした祖父を祝ってほしいと言ったのだ。

私も、すっかりそのペースに巻き込まれ、最近ではこのような機会にしか会えない親戚の人たちとの話の輪に加わっていた。

太一爺さんは、K市では二番目——男性では一番——の長寿者だったそうで、棺の側には総理大臣の表彰状、市長からの生花などが飾られていた。

葬儀は、紫の衣の僧侶が緑の衣の坊主を二人従え読経する中で、町の有力者と思われる人たちが次々に焼香した。

もう友達とて残っていない彼の弔辞は市長が述べた。一八九三年生まれの太一は二〇世紀を駆け抜け二一世紀を五ヶ月生きたことになる。

大理石の床がひやりと感じられる火葬場での最後の別れの場になると、さすがに死の厳粛なる事実を実感させられた。しかし、精進落としともなると、再び陽気に太一の話題に花を咲かせた。

皆の話の総合すると、彼は、醸造業の家督を幸一に譲り引退してからは、市会議員・議長などを勤め、誰の相談にもなる気さくさで、寄付などにも応じるので、街での評判は悪からう筈もなかった。その上、『夜這いで鍛えた』と、艶話にも事欠かず、なにかと話題に

なる街の人気者だったようだ。

終わったときはまだ夕暮れだったが、「たまに来たのだから泊まって、ゆっくりしてゆけ」との幸一の勧めで、長男の陽一夫妻、それに東京からの女性——私より十歳ぐらい上だろうか——は、車に分乗して幸一の屋敷に向かった。

久しぶりの近親者との再会を悦び、戻ると再び酒の席が設けられた。

そこで、私に幸一の妻里子が東京からの女性を、自分と七つ違いの妹で荻窪に住む医者  
の奥さんだと紹介した。

彼女は「ああ、康子さんの息子さんね」と、母の名前を口にすると、しげしげと私を眺め、「お母さん生きておられたら今何歳になられるのかしら？」と、親しげに微笑みかけ、私が指折りながら「九六歳ですかね」と応えると大きく肯いた。

明かりの下でよく見ると、丸顔で小柄な彼女はもうウエストは消滅しているものの、程よい肉付きで背筋もしゃんと伸びている。入念に縁取られた透き通るような口紅が瑞々しい。七三歳だと話していたが、それにしても若く見えた。多分若いときは美人と言うよりかわいい感じだったのだろう、童顔は歳をとりによくいからと思った。

時々、私を見つめる目は（以前、会ったことがあるわ）と、言わんげだが、私は紹介された『伊洲院』との名前に覚えはなかった。

幸一が笑いながら、

「爺さんより、わしの方が先に逝ってしまうのではと、心配しとったが……」と話し出すと、その言葉に即されたかに太一爺の話になる。

私は、『紀元は二六〇〇年（一九四〇年）』戦争が始まる前年の生まれだが、当時神戸に住んでいた私たちは激しくなる空襲を避け、この播州平野の東に位置するM町に疎開して三年ほど過ごしたのだった。

代々、造酒屋を営む梨田家はM町での屈指の素封家であったため、戦後の食糧難もあまり苦労した覚えもなく、しかも、梨田家の縁者とのことで「疎開だ」と、いじめられることもなく過ごせた疎開時代の話を思い出した。

丁度小学校に入学する前まで過ごしたM町は今ではK市に併合されているが、今でも付近はあまり開発されておらず古い街並みも残っていた。道はさすがに舗装されているものの、少し歩くと田んぼが見られ、ザリカニ採りをした当時が思い出された。

そのような疎開時代の話をしていた私が、

「太一爺さんも曾孫の結婚式にまで出席されたのですから、満足だったでしょう」と、神戸で催された陽一の長男の結婚式で真赤なカーペット上をすり足で歩く姿を思い浮かべ、「ヴァージン・ロードを歩む姿など初めてだったでしょう。悦んだのではないですか？」

梨田家自慢の吟醸酒は、辛口でさらっとして口当たりがよい。幸一はもう八十半を過ぎていのにさすが酒屋の隠居だ。ペースはゆっくりだが杯を放さない。ふと、何か考え込むかに首を傾げ椅子の肘掛に両手をあてていたが、やおら身を乗り出すと、

「いや、あの爺さんはおもろい人やわ、あまり感心しおらん。それどころか昔の結婚式のほうが面白かったといいおる。『なんでやねん』と聞くと、『今の結婚式は決められたとおりに式が進められる。丁度、観光バスに乗って名所めぐりをしとるよ』に思えてならんと、いうのじゃ」

「確かに、我々の結婚式もおもろかったな」と、なにを思い出したのか笑いを抑えかねる

かに頭をかきながらこう語りだした。

戦前に大学を卒業した幸一伯父の結婚は、戦争の始まる前の年、丁度私が生まれた年だったそうだ。応召されるので急いだのだようだが、いわゆる田舎の裕福な家で行われる式の典型だったらしく、大きな自分の屋敷を開放して行われた。親類縁者はもとより、町の悪童連にも酒が振舞われる。が、ある時刻になると「これから先はあかん」と、彼らは追い出される。

やがて『高砂や』が始まり色々な行事が繰り広げられ、新郎新婦のお床入り前になると、『では』と、紋付袴で正座した客が姿勢を正しおり『げに、春の月は朧にして、静かに暮れてゆくほどに……』と、朗々と謡いだしおつてな。わしらは緊張して聞いておると、どうも言うところが妙なんや。よう聞いとると、おっさんセックスどうするのか教えとるねん。……まあ、自分の経験に基づくセックス談義やがな。なに言うとおつたかは覚えておらんが、皆くすりともしおらん。そんで、『夜もふかふかとふけて、互いにかまますモモとモモ、これぞ人の世の栄えなる、栄えなる……』と、なつて終わりやつた」

語り終えると幸一は、陽やけた顔を幾分あからめ皆に向けると「ははは……」と大笑いすると、入れ歯が外れたのか口元に手を当てた。皆つられて大笑いした。

私はふと、先ほどの皆が『太一爺さんは、夜這いの名手』と、話していたのを思い出し、「この辺は夜這いの盛んな所だったと聞いていますが、おじさんの時代にはもうなかったのですか？」と聞くと、彼はすっかり禿げ上がった頭をつるつとまで皆を見渡すと、「あつたそうや。だが、わしらは中学になると神戸の学校に入れられたさかい、M町には住んでおらへん、そやから、あかんかった。わしも一度経験してみたいと思つたがのう。爺さんの話によると、夜這いちゆうのは結婚を前提とした準備期間ではあらへん。若者の性教育の場ですわ。若い者に健全な楽しみとして性を開放するのが目的や。それに、これにより若者がムラを離れていくのを繋ぎとめる目的もあつたのとちやいますか」

座はすっかりくだけてきて、告別式の後というより太一爺さんを偲ぶ会といった雰囲気です。陽一は、上機嫌の親父をけしかけるかに、

「おれたちは、結婚を前提するセックス以外があかんと教わつた。えらい不公平やな。いつからそうなつたんやろ」  
私も調子にのつて、

「確かに日本の性道徳は、平安の時代から源氏の世界にみられるようにおらかなものだった。それが明治になって入ってきたキリスト教の禁欲主義が近代思想と受け取られ、夜這いなどは文明国家ではあつてはならない野蛮な行為とされてしまったのでしよう。大体日本人には恋愛などと言う概念もなかったし、ましてや愛は清いもので夫婦以外のセックスを禁止するなどは思いも寄らなかつたのでしようね」

「そや、爺さんがよく言うとおつた。『これはキリスト教の陰謀や。それにまた、お調子者の透谷が上乗りして純愛なんてことを言い出しおつて……』」

久しぶりの近親者との談笑が幸一をすっかり饒舌にしたのか、「わしも聞いた話だが」と再び語りだした。

彼の語るところでは、一人前と認められないと『夜這い』は許されなかつたそうだ。つまり、一五歳になると若者は、米俵などを担がされ、労働能力が充分にあるかが試さ

れ、そのようなテストに合格した者が一人前と認められ、若衆入りを許可される。若衆になると賃金も一人前になるし、夜這いも公認される。

「無事この若衆入りを果たした者が、ムラの仏堂のような場所に集められ若衆入りの儀式が行われる。そのメインイベントが、性教育、つまり夜這いの伝授や。教育係は、先ずはムラの後家さん、尼だが、足りんと普通のオバはんがくじ引きで選ばれる。男女に分かれて互いの手に『南、無、阿、弥、陀、仏』と書き、双方の手を見せ合い、あったもの同士がカップルになる。狭いムラだと叔母と当たることもあるそう。その指導は、なんせ商売女とちやうさかい行き届いたものやったそう。女も同じようだな、爺さんはその指南番をよく勤めたそうで『千人切りはようできんかったが、まあ半分ぐらいはいつとるやろ』と、よう自慢しおった」

ここまで話し終えると幸一は「ちよっと……」と、トイレに立ち上がった。

息子の陽一たちは、いつも聞かされているらしく、

「今日は、親父、ギャラリーが多いのでえらいご機嫌や。親父の十八番まだ仰山ありませ。伊洲院のおばはんなど、どないでしたの」

話を向けられた彼女は、「あほらし……」と言うと、それでも何か思い出したらしく、しばらくすくすく笑っていた。

排泄を済ませた幸一は、今まで誰にも話せず『王様の耳はロバの耳』と竹やぶで話す男のように語りだした。

「そのような男女にとっても、狭い街やから見ず知らずとは言わぬまでも、性的行為をするには羞恥心がおます。商売女やない、素人や。それらが互いに打ち解けやすくするには工夫がいる。その工夫が『柿の木問答』と、言われる儀式やねん」

彼の顔は語るほどにつやを増し、とても八〇半ばになるとは思えなかった。皺も心持減ったように感じられる。

「それはな……」と、話し出すしたが笑いで中断する。きれいに剃られた濃い顎髭をこするようにして間合いを取り、皆の好奇心に満ちた眼差しを確かめると、

「二人で床に入ると……、男が『あんたのどこ、柿の木あるの……』と、問いかける。『はい、あります』と、女が応え男を抱き寄せる。ここで初めて額にキスし徐々に下がっていき、口にキスしてくれる」

彼が妻の里子のほうに無意識に手を伸ばすと、彼女がその手をぴしゃりと叩いた。

『『よう実がなりますか』と、問うと女が『はい、ようなります』と応え、胸をひろげて乳房をみせてくれる。男がためらっていると『おまえ、おっかさんの乳飲んだことあるんやろう』と、乳房にさわらせ、口に含ませてくれる。こうなると女のほうが、度胸がええ』  
幸一は、つまみの沢庵を手でつまむと、ひょいっと口に放り込みぼりぼりと食べると、巧そうに酒を一口飲み、口を潤すと実況放送さながらに再びしゃべりだした。

「もうこのころになると、女の腰巻などはあらへん。身を寄せてくると手を茂みに導き、女の性感帯をたっぷり教えこむ。そこで調子がでた男が『上って、ちぎってもええか』と、声をかけると『どうぞ上がってちぎってください』となり、もぞもぞしとると『はよ、ちぎらんかい』と、けつを叩かれる」

それまで黙っているで耳が遠いのかと思っていた里子おばが、

「嫌なときは、『まだ、青いで……』と、言うねん」と、突然大きな声を出した。

あくる日、久しぶりに疎開時代の懐かしかった場所を回り午後帰ろうとすると、「伊洲院の叔母さんと一緒に帰ったら」との勧めで、彼女と一緒に新幹線に乗った。

新大阪で『のぞみ』に乗り換え、列車の中でもらった缶入りの冷酒を飲むと、口当たりがよく、京都を過ぎるころにはほぼ一缶が空になっていた。彼女は少し飲んだようだが、もう目を赤らめている。丁寧に塗られた口紅を気にするように、たまに缶のふちに付いた紅を拭いていた。ウィークデー昼間のグリーン車に、人はまばらだった。規則的な揺れが酔いを加速する。私は特に彼女との話題もなく手持ち無沙汰で二本目の缶を空けた。

列車は、すでに夕焼に染まり始めた岩肌を覗かせる伊吹山のみもとを疾走していた。

(石田三成終焉の地……) などと思いながら眺めていると、彼女がゆつくりと私に身体を向けると、「あなた、私のことを覚えていない?」

私はびつくりして再度眺めたが覚えはなかった。(いつか冠婚葬祭の席で一緒だったことがあるのだろうか)と、考えたが思い出せなかった。その私を彼女は品定めするかに入念に眺めわたし、幾分紅みを帯びた顔で一人で肯きながら、

「無理もないわね……、こんなお婆さんになっているし、名前も変わっているのだから」  
そういうと、彼女はふと口をつぐみ、背を伸ばすようにしてリクライニングシートを少し倒すと、身体を私の方に向けた。

「高松にいる時は、まだ本庄だったから……」

私はびつくりして彼女を見つめた。丸顔にベージュのリップ、歳の割にはつややかな肌、耳を軽く覆う髪、そのいずれにも見覚えがなかったが、『本庄』は忘れるはずのない名前だった。

私は、大学を卒業する夏休み、四国のS化学に実習に行った。鳴り物入りで重化学工業化政策が進められていたこの時代、理系の学生は売り手市場だった。それに実習にはアルバイト料がでて小遣いにもなる。私は終わった後の観光も考慮に入れて、なるべく遠くの工場への実習を希望したのだった。狙い通り就職を控えているため大事にされた。S化学の主力工場のあるN市はS化学の街ではあったが、田舎町で娯楽施設は少なかった。その分、会社のクラブ、スポーツ施設などが充実していた。

週末の土曜日は会社のクラブで、会社主催のダンスパーティーが催された。女子はおおむね従業員の子女で、ダンス好きな私にとっては楽しい一時だった。それに、学生だとなるとちやほやしてもらえる。どちらかといえばシャイな私でも踊る相手に苦労しなかった。先輩の話では上司の子女が多いので、噂にでもなると大変だとのことだった。

母は、私が四国行を話すと、高松に親戚があるから帰りに寄るようにと、叔母からの返事の手紙を私に渡した。当時本庄の叔母は一人暮らしだった。なんでも、二三年前に離婚して実家のある高松に住んでいたらしい。

母から渡された手紙の地図を頼りに行くと、古いがしっかりした門構えの一軒家にたどり着いた。何でも彼女の実家の持ち家だったようだ。

母から言われたとき、大人としゃべることの気重さであまり乗り気ではなかったが、彼女は私の杞憂を知っていたかに、——母がなにか話していたに違いない——気さくに話しかけてくれた。丸顔で小さな口元のせいかな童顔に見え、三〇代後半だと聞いていたが、

それよりずっと若く見えた。

一人暮らして、久々の客がうれしかったのか、「暑かったでしょう」と、早速ビールをご馳走してくれた。一人っ子の私は、家では母以外の女性と身近で話したこともなかった。それに、母はあまり化粧もしないので、叔母のしつかりと縁取り描かれた真っ赤な唇は新鮮で、テニスでもやるのか露出したきれいに陽やけた両腕は、若い女性のものだった。それに、ベージュの光沢あるノンスリーブのTシャツが、乳房の丸みをなぞり先端が突き出た胸は、母のものより自然の形をしているように思えた。後でわかったのだがノーブラだった。

話の初めは、母の近況からはじまったと思う。やがて、クラブで行われた週末のパーティーの話になると、彼女は小さな笑い声を上げ、

「N市はS化学の街で、なにもないから……、若い人の社交場なのね。あなた、S化学に就職するつもり？」

「実は、化学系のナンバーワンの会社なので最も有力な候補と思ってきたのですが、やはり田舎はダメだと悟りました。休日には瀬戸内海の島など案内してもらい、きれいだと思います。でも、ここに一生住むとなると考えてしまう。やはり、旅で訊ねてくる場所ではないでしょうか」

「そうね、あなたも小学校以来ずっと都会生活でしょう。だったら、やめたほうがいいわ。わたしでも東京付近で生活したいもの」

彼女の高松の実家は、代々の味噌屋で姉の嫁ぎ先であった梨田の伯父太一の世話で、岡山の同業者の元へ嫁いだのだが、マザゴンの夫に失望し子供のいないことを幸いに、自ら離婚を申し出のたさうだ。——後で知ったのだが、二年後に東京で開業する医師と結婚し伊洲院となったのださうだ。——

一人でどんな生活をしているのだろうかとの好奇心で訊ねると、驚いたことに彼女は中古のルノーを乗り回していると言う。昨年の東京オリンピックなどで好景気が宣伝されているとはいえ、この二年物の小型の中古車でさえ当時の初任給の一〇倍はする。それに、名神高速が一部開通し『高速道路の幕開け』と騒がれてはいたが、その恩恵に浴するにはまだ大分間があった。しかも、当時の車はよく故障する。パンクなどは日常茶飯事の出来事だ。私が「女性一人では、故障などで困りませんか」と問うと、

「ここは、まだ田舎だから親切にしてもらえるわ。この間も踏み切りでエンストしたら男の人が皆で押してくれたし、パンクなども自分で直したことなどないわ」と、こともなげに応える。

「きれいな女性は得ですね」 阿り気味に言う、

「あなた、結構お世辞言うじゃない。嘘とわかっていても褒められると悪い気はしないわ。お母さんが内弁慶で、女の子とはろくに話もできないのではと心配していたけど……、大丈夫そうね。あなた、わたしが運転して案内するからゆっくりしていきなさい」

翌日から、彼女の運転で付近の観光に出掛けた。

まずは、琴平の金毘羅様へと階段を上る。慣れているのか、暑さにもかかわらず彼女の方が早い。「若いのになによ！」と、ハッパをかけられる。

栗林公園は街中なのに意外に人も少なく静かだった。かき氷で暑さをしのぎながら歩い

た。それに彼女の運転は軽快だし、狭いところでも結構器用にバックなどで駐車していた。たまに外したサンングラスを、Tシャツの胸元に引つ掛ける。そのサンングラスが胸の谷間を妙に意識させ、私はどきどきしていた。男性が、ちやほやするはずだ。

名物の讃岐うどんは、しこしこしておいしい。夕食時の食卓には一人前扱いしてくれているせいも、必ずビールがあった。彼女も結構飲む。懐を気にすることもなく観光できるのは有難かった。しかも、彼女は私と一回りぐらい違うにもかかわらず少し上の姉貴といった感じで、大人たちになりがちな説教じみた話など一切せず、話題にもあまりギャップを感じなかった。

話しているとこれが離婚して一人で入る女性かと思うくらい明るく、『生活を楽しもう』という雰囲気にあふれていた。(なぜ、こんな女性がまだ一人なのだろう？離婚歴があるとはいえ素敵な人なの)と思った。

明日は帰ろうと言う前日、屋島に行った。瀬戸内海を見下ろすために存在するような平らな丘だ。展望台に上るための階段を上がるときふと見上げると先に上っているロング・スカートの彼女の後姿が目についた。スカートは、上部半分が彼女のヒップにピッタリと貼りつき、裾で拵がっている。その曲線になぞられた彼女のヒップは意外に重量感があった。ハイヒールを履いた締まった足首、一段上がるごとに左右に揺れるお尻の丸み。

私は、その時初めてスカートの下にある肉体を感じると、彼女が叔母であるより女性だと意識させられた。そのような意識で見直すと胸も人一倍大きい。たまにハンカチを胸元に当てて拭く行為などを、今まではなにげなく見ていたのに、妙に意識されだすと、私の中で彼女の衣服は完全に剥ぎ取られていた。

晚餐は、付近のイタリア料理店であった。

彼女は、馴染みらしくマスターが色々サービスをする。時々向けるマスターの目は、明らかに男が女に向ける眼差しだった。四国に来てからの久しぶりのイタリアンはとても美味しかった。それに特別に用意してくれたらしいキャンデー・ワイン——当時はなかなか手に入らない——は、特に美味しかった。二人共、少し酔ってくる彼女は私にとって年上のガールフレンドに思えてきた。

家に戻り、風呂を浴びると二階の窓からの風が心地よく、過ごしよい夜だった。いつの間にか少しまどろんだのだろうか、何か唇に当たった気がして、自分で舐めてみた。が、同じような湿った柔らかい感覚は去らなかつた。うすめ目を開けると、彼女の顔があった。朦朧としたまま、手でさぐると彼女は何もつけていなかった。

はっとして起き上がろうとすると、彼女は「ほら……」と呟くと、重い乳房を私の口に押し付けた。弾力ある乳房に息苦しくなりながらも、なされるままに乳首を口に含んだ。やがて下りてきた彼女の手が私のものに触れると、たまらず暴発した。

寝たのは明け方だと思う。

列車は、すでに明かりが灯された浜松駅を通過していた。

今にして思うと、蜘蛛の巣にかかった昆虫みたいになすすべもなかつた私をどう見ているのかと思うと、少し恥ずかしかつた。

(彼女は……)と、目を向けると、窓の方に顔を向けたまま眠っているようだった。

私も目をつぶると、その場面が、一齣一齣が浮かび上がってきた。それは、甘美な映像

だった。

少しまどろんだのか、「ただいま定刻で小田原を通過しています」との、アナウンスまで気が付かなかった。

飲み終えた酒缶を片付けていると彼女も目を覚ました。やがて、横浜に近づいた列車が速度を落とし始めたのにあわせ、私が降り支度を整え、別れを告げようとすると、彼女は私の耳元に顔を寄せると、「わたしの指南役は、太一伯父さん。あなた……、あの時が初めてだったの……」と、小声で呟いた。

私は、その言葉に戸惑ったが（そうか、太一爺さんはルシフェル、……伊洲院のおばさんはイブだったのだ……）と思い、まぶしげに彼女に目をやると、彼女は唇をつぼめるようにして笑っていた。つられて、思わず私も微笑んだ。二人にしかわからない笑みだった。

やがて、彼女は「それでは、お元気でね……」と、別れの言葉を口にするときれいにマニキュア―された手を差し出した。

柔らかい暖かい手だった。